

令和元年度自己評価表			白兎のあいうえお あ いさつを交わし みんななかよく い のちはひとつ 自分も友達も大切に う んどうをして 健康で元気な身体 え がおいっぱい 楽しんで学ぶ学校 お もいやりのある 豊かな心			鳥取県立白兎養護学校			
中長期目標 (学校ビジョン)		人と関わりながら自立と社会参加に向けて努力する子どもの育成				今年度の重点目標		・地域や企業等と連携した教育活動の推進 ・「何を教える(学ぶ)のか」教育内容の整理 ・様々な危険から安全を確保する防災・安全教育の充実 ・チームで取り組む教育相談・支援の充実 ・地域におけるセンター的機能の充実	
年 度 当 初						評価結果 (1) 月			
評価項目	具体項目	学部 学級	現 状	目標 (年度末の目指す姿)	目標達成のための方策	経過・達成状況		評価	改善方策
1 地域や企業等と連携した教育活動の推進	○社会とのつながりを意識した授業づくり ○発達段階、年齢に応じた社会資源を活用した取り組みの広がり ○福祉機関、病院等との連携	小学部	・地域生活につながる学習活動(基本的生活習慣、余暇活動等)を充実させていく必要がある。	・基本的生活習慣の確立や人との関わりの広がりを目指した実践を重ねている。	・懇談や支援会議等で児童の発達の状況や将来像について共有し、学校、家庭、関係諸機関で一貫した指導を行う。	・懇談や支援会議等、家庭やデイサービス等の関係機関と連携をし、一貫した指導のもとに基本的生活習慣の定着が図られている。 ・地域の保育園、小学校との交流に加え、さらに人との関わりを広げられるような児童の実態にあった交流の機会を考えていく必要がある。	B	・デイサービス等の関係機関との連携については、個別のニーズに応じて対応している段階であり、連携の仕方や内容について検討し共通理解していく必要がある。 ・児童の実態に合わせて、交流の目的や内容を見直していく。	
		中学部	・地区老人クラブとの交流会や総合的な学習(探究)の時間を通して、地域の人、ものに関心を広げている。	・生徒が地域を知り、地域の方とのふれあいを有意義に感じる活動を計画推進している。	・地域とつながる学習の内容を検討し、計画的に地域とつながる学習を進めていく。	・保健体育学習のグラウンドゴルフの学習協力者として地域の数名の方をお願いし学習を進めた。学びながら親睦が図れ有意義だった。 ・総合的な学習や教科の学習で地域とつながる学習内容を模索し、できることから実践してきた。	B	・従来通りの地域交流を見直し、生徒にとって無理のない、目標を意識した交流の在り方を検討し、次年度に実践していく。	
		高等部	・卒業後に働き続けられるよう、自己理解(自己有用感・障がい理解)の深まりが必要である。	・生徒と保護者、学校が、適切な自己理解のもと、卒業後の働く姿をイメージしながら進路について考えている。	・適切な実態把握のもと、実習先や地域を巻き込んだ学習を展開していくことで、より適切な自己理解が図れるようにする。	・地域の教育力を取り入れた学習活動を数多く実践し、生徒の役立ち感や満足感、自信を高めることができた。また、現場実習(事前事後の学習、指導を含む)を通して、卒業後の働くイメージを生徒本人、保護者、学校で共有することができつつある。	B	・実践の中で見えた課題を解決するための手立てを講じながら取り組みを継続する。	
		訪問学級	・病院関係者(看護師、医療、リハビリ、療育等)や保護者と連携を図りながら、安心・安全な環境作りに向け、実態把握に努めている。	・児童生徒一人一人が障がいやその程度、発達段階に応じて学習に見通しや期待を持ったり、病棟と学校生活への切り替えを意識したりして生活する。	・病棟からの申し受けやリハビリ懇談会等で得た情報を日々の学習に取り入れ、支援の改善や充実を図る。	・病棟スタッフと連携を図り、病棟で使っている腹臥位装置を学校で使った。また、ストレッチについて理学療法士に学び、「からだ」以外の学習にも応用することが増えた。 ・進路懇談会を合同開催し、卒業後の生活について保護者を含め、看護、医療、リハビリ、療育のスタッフと共通理解を図った。	B	・病棟の行事や予定等を聞き、児童生徒が見通しを持てるようにしたり、教材のアイデアを情報交換したりして、病棟スタッフ(療育)と連携を深める。 ・病棟担当看護師と連携を密にし、得た情報を日々の学習に取り入れていく。	
		総務部	地域の方々とのかかわりの充実が課題である。	・白兎まつりやクリーンクリーン活動等を通して、地域の方々とのふれあいを深めている。	行事の案内や様子をホームページに掲載する。行事後にアンケートを実施し、問題点を改善していく。	ホームページに行事の案内や様子を掲載した。多くの方々に来ていただいで児童生徒の活動の様子や作品展等を見ていただいた。児童生徒が地域の方々とは話を交わすなど触れ合う機会がもてた。次年度にいかすようアンケートを実施した。	B	児童生徒の実態の応じ、ねらいや無理のない活動内容を総務部や各学部で検討していく。	
2 「何を教える(学ぶ)のか」教育内容の整理	○学習集団の育成 ○主体的に学ぶ態度の育成 ○学ぶ環境の工夫 ○内容の整理	小学部	・障がいの重度重複化、多様化に伴い、児童の実態に合った教育課程、教育内容を検討していく必要がある。	・的確な実態把握を行い、教育課程や教育内容について検討し、改善が図られている。	・本年度の研究(教育内容等の整理)の推進とともに、学部の教育課程検討委員会において検討する。	・各教科で年間指導計画や教育内容を整理したことは、来年度の学習指導要領実施に向け、目標設定や評価を行う上で教科の視点を持つことができ大いに意義があった。 ・児童の実態、学習のねらいを見直し、来年度の教育課程を検討し改善を図った。	B	・来年度からの学習指導要領全面実施にむけての学部としての方針、具体的な取り組みの方針を明確にする必要がある。 ・新しい年間指導計画で実施しながら、随時、見直し改善を図る。	
		中学部	・昨年度の研究の成果と課題を踏まえ授業改善に取り組んでいる。本年度は、地域とつながる学習及び新学習指導要領の趣旨を踏まえた教育計画立案をしていきたい。	・新しい教育の流れを踏まえ、生徒実態に即した教育内容の整理を行い、学ぶ意欲の向上を目指した授業づくりに取り組んでいる。	・昨年度の研究を活かして学ぶ意欲を高める授業づくりに努める。	・新学習指導要領の趣旨を踏まえ教育内容の整理を行った。学部全体の取り組みにはならなかったが、一人一人の教員が学ぶ意欲の向上を目指した授業づくりを日々実践してきた。	B	・昨年度活用した授業づくりのデザインシートや指導計画の目標設定のために活用した指導内容確認表等を今後も生かしていく取り組みを検討していく。	
		高等部	・卒業後の自立した生活に必要な基本的生活習慣が定着していない。	・生徒と保護者、学校が、自立に向けて必要な力を共通理解し、その定着に努めている。	・生徒、保護者一人一人の存在が認められる安心感を基盤としながら、普段の肯定的な関わり、連絡帳や電話等における関係づくりを進めていく中で、生徒、保護者との信頼関係を構築する。	・生徒・保護者との信頼関係を基盤に、互いに情報を共有し合いながら生徒の自立に必要な力の定着に努めた。個々の自立に必要な力については、関係機関等と連携するなどしてさらに検討する必要がある。	B	・生徒・保護者とのより深い信頼関係を構築していく。関係機関等を巻き込んだ教育相談をより取り入れていくことで、自立に向けて必要な力をより共有できるようにする。	
		訪問学級	・ICT教育機器(視線入力装置、iPad、個に合ったアプリ等)を日々の学習の中で活用しはじめている。	・ICT教育機器を使って主体的に学習に取り組んでいる。	・実態に応じた適切な環境を学部内で協力しながら整備し、アイデアを出し合い、日々改善に努める。	・ICT教育機器等を学習内容に合わせて取り入れてきた。児童生徒の意欲につながってきた。 ・教員間でICT機器の研修を行い、情報共有しつつある。	B	・児童生徒の実態に応じ、様々な感覚を生かした環境の工夫を行う。 ・情報共有したICT機器等を教員みんなが使えるようにする。	
		教務部	・個別の教育支援計画や個別の指導計画の様式が新学習指導要領や白兎の付けたい力に対応していない。	・個別の教育支計画や個別の指導計画の様式を、研究で行われる年間指導計画の整理と同じ方向性で見直すことができている。	・個別の教育支援計画や個別の指導計画の様式、それを作成するための保護者アンケートや記入例の見直しを行う。	・個別の支援計画や個別の指導計画の様式や記入方法等について、年間を通して見直しや検討を行った。教務部で案を作成し、各学部の意見をふまえながら、段階的に変更していくよう方針を定めた。	B	・個別の指導計画の目標設定をする中での問題点や難しさなどの意見を聞きながら、より具体的でわかりやすい記入方法の仕方についてまとめていく。 ・年度末の業務を減らすため、個別の指導計画の写しを指導要録の記入に替える方向で、県教委とも相談しながら検討していく。	
	研究部	・各教科・領域における具体的な指導内容の設定及び配列、「教科別の指導」と「各教科等を合わせた指導」との関連、単元間のつながり等についての検討・整理が必要である。	・新学習指導要領および、白兎の付けたい力に合わせた教育内容や指導計画の整理が行われている。	・全職員体制でグループ研究・学部研究を行い、教育内容等の整理を行う。 ・県内・県外校の視察や情報交換等を行う等、情報を収集を図り、学習状況を把握できる仕組みの整理を行う。	・全教職員で1・1のグループ別れて、新学習指導要領および、白兎の付けたい力をふまえた教育内容の見直しを行うことができた。約200件の年間指導計画や指導の在り方を見直すことができた。年間指導計画では、新学習指導要領の育成を目指す資質・能力の3つ柱に応じた単元目標の見直しや、新学習指導要領の学習内容や段階に応じた見直しができた。	B	・教育内容や指導計画の整備について各教科等を合わせた指導やいくつかの教科(外国語、情報、総合的学習の時間、総合的探究の時間)については見直しや整備をしていない。今後の研究で見直しを検討していく。 ・グループ研究で教育内容や指導計画の見直しを行ったが、グループによっては人数等の問題から整備が不十分な指導計画がある。年度内に研究部を中心に整備を行う。		
		・学習評価の在り方について検討し、「評価」－「改善」につなげる仕組みを整備する必要がある。	・児童生徒の学習状況の把握に活用できる仕組みの整理が行われている。	・研究部だけでなく、教務部、キャリア教育部等他の分掌や研究推進委員会等連携を図り、協議や整備を行う。	・教務部、キャリア教育部、主事会と情報交換を行い、学習状況及び、白兎の付けたい力の積み上げ状況を把握できる仕組みについて検討した。現状として、新学習指導要領に対応した学習状況の実態把握についての必要性が大きいため、教務部、主事会で提案があった指導内容確認表を活用する方向を検討している。	C	・実態把握の在り方や白兎の付けたい力の活用の仕方について、研究部だけでなく学部、分掌を越えて検討をしていきたい。研究推進委員会での協議や、白兎プロジェクト委員会での情報交換等を検討していきたい。		
○教材の工夫									

		キャリア教育部	・「児童生徒に付けたい力」が本校の障がいの重度・重複化に対応した計画や学習内容になっているか検討することが課題である。卒業後の生活を見据えた、一貫性のあるキャリア発達を大切にした教育を推進する必要がある。	・「付けたい力」が本校の実態に対応していることが分かり、実態に応じた目標を意識して指導している。 ・各学年の産業現場等における実習の意義を理解し、生徒や保護者に説明することができる。	・現場実習ふりかえりの会での学校に対する意見を集約する。障がい福祉サービス事業所、卒業生・保護者への聞き取りを行う。 ・産業現場等における実習について中学部から高等部6年間の移行が分かるように整理する。進路に関わる学習の見直しをする。	・産業現場等における実習で利用した25事業所（B型事業所、生活介護事業所）、17名の卒業生（B型事業所）への聞き取りを行った。結果から「付けたい力」が本校の実態に対応していると考えられる。より丁寧に分析をして、指導に生かせるようにしていきたい。 ・産業現場等における実習について、中学部から高等部6年間の移行が分かるように進路先毎に可視化できるものを作成した。産業現場等における実習の事前事後学習の内容や形態、校内作業実習のあり方等を見直した。	B	・聞き取り調査結果と「付けたい力」の関連について丁寧に分析をする。事業所の方や卒業生本人の聞き取り内容を指導にいかせるように整理をする。 ・中学部、高等部の産業現場等における実習のねらいや手続き等の見直しを行う。進路決定に向けて見通しをもてるように共通理解を図り生徒や保護者に説明できるようにする。
		情報教育部	・情報機器の操作、活用マニュアル等の整備が十分でなく、アプリ等の活用も不十分である。 ・情報モラルの教職員の意識にばらつきがある。 ・図書館資料の積極的な活用が不十分である。	・情報機器の活用や、アプリの活用方法について理解している教職員が増えている。 ・基本的な情報モラルについての知識を習得している。 ・図書館資料を活用した授業がどの学部でも行われている。	・情報機器のマニュアルを整備、ICTサポート事業との連携等で研修の機会を設ける。 ・情報モラルに対する研修会を実施する。 ・バリアフリー資料や図書館資料を活用した授業実践例の紹介を行う。	・前に引き続き、教職員から問い合わせのあった情報機器の操作方法についてまとめたものを情報部にマニュアルファイルとして配布したことで、問い合わせに対応できる教員が増えた。 ・全職員対象にアンケートを実施し個人情報の取扱いについての現状確認を行った。 ・どの学部でも国語や社会等の学習を中心に図書館資料を活用した授業が行われた。マルチメディアDAISY図書の実態に応じてスクリーンに投影して読み聞かせを行う等、提示の仕方も工夫した。	B	・教職員からの機器操作についての問い合わせへの対応をしてきたが、解決にいたらなかったものもあり、今後の対応の方向性を検討する必要がある。 ・ipadに入っているアプリについても活用例の周知に努める。 ・個人情報の適切な取扱いについて再度確認し、規則厳守を徹底する。 ・読み聞かせ等、国語科や生単を中心に多くの図書館資料が活用されたが、他教科での調べ学習でもっと活用を促していく必要がある。マルチメディアDAISY図書の整備途中であり、図書館への新しいパソコン導入とともに今後普及させていく。
3 様々な危険から安全を確保する防災・安全教育の充実	○防災、災害に対する対応策の整備 ○児童生徒の防災意識を高める活動の推進	健康安全部	・災害時における対応の整備が進んできた。避難訓練、児童生徒の引き渡し訓練の実施方法を再検討していくことでより一層の安全教育に努めていく。	・様々な災害から自分を守る方法を学ぼうとする児童生徒の育成を図りながら教職員の意識が向上している。	・避難訓練、児童生徒引き渡し訓練の内容を再検討しより充実した訓練にする。 ・学校安全計画に従って着実な仕事を行う。	・交通安全教室、火災の避難訓練、児童生徒引き渡し訓練、地震・津波の避難訓練等を実施した。各種訓練に児童生徒は落ち着いて参加することができた。教職員の防災に対する安全意識も高まってきている。	B	・児童生徒引き渡し訓練の体制や保護者への引き渡し方法、関係機関との連携を充実させることでより一層の安全教育に取り組んでいく。 ・実際の場面を想定した訓練を今後も引き続き実施していくことで児童生徒、教職員が安全教育に対する意識を高められるようにする。
		学部	・食物アレルギーや障がいや疾病に配慮の必要な児童生徒について健康、安全面に関わる危機管理についての教員一人一人の意識の高揚と体制を整備する必要がある。	・児童生徒の疾患や行動の把握、アレルギーや感染症の対応について共通理解し、学部全体で危機管理の意識が高まっている。	・学部会等で日々のヒヤリハットに関する情報を共有し、要因を検証し適切に対応する。	・それぞれの学部で、児童生徒に関する情報の共有に努めた。学部会ではヒヤリハットについて報告し合い、些細なことでも職員間で共有することで、危機管理の意識が高まったり、視点が広がったりした。ただし、危機意識が続くよう定期的な確認が必要である。 ・災害時のための備蓄品について学習した生徒は、防災用具の使用方法について周りが知らないという課題に気づき、全校に周知したいという意欲を高めた。また、家庭での備えについてそれぞれが考えていくきっかけとなった。	B	・より効果的な情報共有の在り方や学校全体としての危機管理の在り方について検討していく。
4 チームで取り組む教育相談・支援の充実	○スムーズな情報共有と関係機関との連携	小学部	・児童の気になる行動に対して、児童を取り巻く状況や家庭や関係諸機関と連携しながら解決していく必要がある。	・関係者間でスムーズな情報共有を行い、気になる事例や問題に対して早期に対応している。	・学部全体で児童について情報を共有するとともに、関係者同士（担任、学年、支援部、SSW、管理職、外部の関係機関等）とつながりを持ち、様々な視点を持って問題解決に努める。	・情報を共有して対応する意識が高まっており、即座に関係者で検討し、学部全体で周知するスムーズな流れができつつある。	B	・非常勤職員等、学部会や職朝に参加できない職員との連携が課題である。より早く小回りのきくチーム編成やネットワークを利用したの効率のよい情報共有の仕方を工夫していく必要がある。
		中学部	・様々な教育課題や相談に対して、関係職員や関係機関につなげる教育相談の充実に向けてきているが、保護者アンケートの結果からは十分に保護者のニーズに沿っているとは言えない結果となっている。	・チーム学部・学年の意識を持ち、支援の検討、生徒指導や保護者対応、教育相談等にあたり、生徒や保護者の信頼を得ている。	・生徒の課題状況に応じたケース会議や相談に努める。 ・情報共有を大切にした職員の一貫した生徒指導、進路指導を進めていく。 ・保護者のニーズを踏まえて、支援部や関係機関とつながる相談支援活動を積極的に進めていく。	・情報共有システムや学部会等で情報共有を心がけ、職員が協力しながら生徒指導、保護者の教育相談への対応を進めてきた。	B	・普段から保護者の困り感に真摯に寄り添えるな関係づくりを心がけ、指導の見通しが持てる懇談、教育相談にしていく。 ・生徒や保護者の情報を共有し、学部、学年で支援指導をしていく。
		高等部	・学部・学年でより一貫した指導・支援をしていくためのシステム構築されていない。	・報告・連絡・相談のシステムが明確化され、学年・学部としての指導・支援が行われている。	・職員朝会、学部会、学年会等で、生徒の実態や現状を報告、連絡、相談し合うシステムを構築することで、学年や学部で連携しながら指導・支援にあたれるようにする。	・学年等で生徒の様子について情報を共有し、チームで支援していく場面が増えた。しかし、学部を通しての情報共有、支援については課題がある。	B	・より効果的な情報共有及びチームでの支援の在り方を検討する。
		支援部	・教育相談体制を整えることで、ケース会議等、チームで取り組む機会が増えてきているが、その取り組みを共有して次に生かす・全体に広げるに至っていない。	・生活や学習の中での教師の気づきや児童生徒の困り感をもとに、適宜ケース会議を開いたり、外部専門家や関係機関につないだりすることで、児童生徒への支援がより充実している。	・早期発見、早期支援・対応に向けた体制づくりと活用に取り組む。（ケース会議、生徒指導との連携、関係機関との連携） ・事例を紹介し合うことで、活用に生かす。	・「各学部の児童生徒情報」で情報共有したり「気になる子のチェックシート」を使って生徒指導と連携したりすることで、ケース会議・関係機関との連携など、早期支援としての次の一歩につながりやすくなった。複数の目による気づきを活かすことができた。 ・外部専門家から指導を受けた内容を、学部会や回覧で共有したり「支援部だより」で紹介したりすることで、児童生徒の困り感に対する支援の充実や気づきに結びついてきている。	B	・今後も、事例を紹介し合うことで、支援の充実につながるようにしていく。
		総務部	・生活の手引き、生活のアンケート等の活用、家庭や関係機関等との連携の充実が必要である。	・支援部や関係機関、家庭と連携し、児童生徒の支援を進めている。	児童生徒情報を学部や支援部等に伝え共有していく。チェックシート、生活の手引きの内容を検討する。	より活用にいかせるようにチェックシートや生活アンケートの内容を改善した。支援部や各学部と連携しながら、情報の共有と、具体的な対応に努め、各学級、各学部で状況に応じて指導を行った。	B	「生活の手引き」をホームページに掲載するなど、保護者への情報提供や啓発の方法を検討して進める。
5 地域におけるセンター的機能の充実	○ニーズに応じた専門性の発揮	支援部	・センター的機能として、担当の職員を中心に取り組んできているが、学校全体としてどう取り組んでいくのかを、整理してさらなる充実を図る必要がある。	・センター的機能の充実に向けて、教育相談や情報発信に生かせるように全教職員ひとりひとりの専門性が高まっている。	・専門性を高めるための研修及び15分研修の充実を図る。（専門性振り返りシートの活用、研修内容の工夫）	・行動上の問題を示す児童生徒への対応についての研修会での協議等をもとに実践した事例を「支援部だより」で紹介したり学部会で報告したりする予定である。 ・15分研修の研修一覧を掲示板にあげ、事前に研修内容を案内した。参加者は内容によってばらつきがあったが、昨年度より増えてきている。参加者のアンケートには参考になったこと等の他にもっと詳しく聞きたい等の要望も上がっていた。 ・学部と連携しながら学校見学や体験入学等を行い、就学や進学等に関する教育相談に当たった。	C	・理論研修やグループ協議を関連付けながら日々の実践に活かせる研修会を計画し専門性の向上を図っていく。 ・事前に15分研修の内容等を詳しく紹介する、事後に参加者アンケートを紹介する等して職員の参加を促していく。また、研修内容によって継続したテーマで計画する等して、15分研修の充実を図っていく。 ・今後も学部や分掌等と協力して特別支援教育研修会等を計画し、その後の教育相談につながるようにしていく。教育相談には学部や分掌等と連携をとりながら当たれるようにしていく。
		全学部・分掌	・それぞれの学部や分掌ではニーズに応じてセンター的機能にかかわることができる素地はあるが、学校体制としては整備が不十分である。 ・一昨年度と比較し時間外労働時間を縮減することはできたが、職員によっては時間外労働が常態化しており改善が必要である。	・学校にある相談等について、必要に応じそれぞれの学部や分掌の強みを生かした支援や助言をしている。 ・会議、研修等必要に応じて効率的に運営されている。 ・教職員が時間にゆとりをもった業務が行われている。 ・時間外勤務時間が削減されている。	・学部、分掌でセンター的機能にかかわることができる内容を整理する。 ・会議等の優先順位を洗い出す。 ・行事の準備等に過剰なものがないかの点検する。 ・業務過剰になっていないか管理職員が配慮する。	・センター的機能は職員の一人一人が担うという意識が芽生えつつある。また、それぞれの学部・分掌で、センター的機能に関わる内容の整理もできつつある。	B	・一人一人のセンター的機能への意識をより高める手立てを模索する。
6 業務改善の取組	○会議、研修等の見直し ○業務の目的の再確認	全体	・一昨年度と比較し時間外労働時間を縮減することはできたが、職員によっては時間外労働が常態化しており改善が必要である。	・会議、研修等必要に応じて効率的に運営されている。 ・教職員が時間にゆとりをもった業務が行われている。 ・時間外勤務時間が削減されている。	・会議等の優先順位を洗い出す。 ・行事の準備等に過剰なものがないかの点検する。 ・業務過剰になっていないか管理職員が配慮する。	・情報共有データベースを利用し、打ち合わせ時間の縮減と情報の確実な伝達に努め、効率的に情報が伝達できるようになってきた。 ・時間外業務が大幅に増加することはなくなったが、個々の働き方には配慮が必要である。	B	・研修等を通して、各人が働き方をかえていこうという意識を高めることが必要である。